

「宇宙県神奈川」の展望

神奈川県産業労働局長 黒岩 信

三菱電機株式会社 常務執行役 CTO 防衛・宇宙システム事業本部長 佐藤 智典

宇宙航空研究開発機構(JAXA) 宇宙科学研究所 所長 藤本 正樹

相模原市長 本村 賢太郎

神奈川宇宙サミット実行委員会 実行委員長/次世代宇宙システム技術研究組合 代表理事 山口 耕司

日本テレビ 宇宙アナウンサー 辻岡 義堂

概要

本セッションは「宇宙県・神奈川」の実現に向けた現状整理と今後の拠点・エコシステム構築を目的とし、県・自治体・アカデミア・企業が北(相模原)と南(湘南)を結ぶ戦略を共有。重大発表として三菱電機より「湘南スペースパーク構想」が公開され、県の「宇宙元年」にふさわしい具体的な拠点計画と、産業拡大に資するオープンで水平分業型のエコシステム形成が合意形成された。

神奈川県の取組状況

- 県内の宇宙産業基盤
 - 北部(相模原)と南部(鎌倉)に国内屈指の衛星メーカー・事業所の集積。
 - 県全体として「クラスター・オブ・クラスターズ」を形成。
- 4つの挑戦(県の推進方針)
 - 総合的な機運醸成
宇宙サミット等を通じた参入促進と認知拡大。
 - 交流拠点整備
KANAGAWA Space Village(橋本駅前/2024年12月設置)にてセミナー・マッチングを展開。
衛星データ活用(AIによる地域課題解決)を後押し。
海外・国際連携とともに成長する取組を強化。
 - 人材の確保・育成
他産業からの人材参入を促進(国の「宇宙標準スキル」活用検討)。
 - 小中高生への興味喚起(宇宙応援アンバサダー「宇宙なんちゃら こてつくん」の取組拡張)。
 - 宇宙と地上のデュアルユース(社会実装):水循環・植物工場等の限界環境技術を地上の持続可能性に転用。
 - 子ども向けの夢のある広報
- 県の姿勢

- 今年を「神奈川の宇宙元年」と位置付け、北と南の創造的連携により拠点間シナジーを加速。

相模原 × スペース × リニア:計画と進捗状況

- 都市特性と新駅整備
 - 72万人都市、都市と自然のベストミックス。県水の水源地域を有し、過度に都会でも田舎でもない環境。
 - 橋本駅周辺にリニア中央新幹線の新駅(神奈川県唯一)を整備予定。旧県立相原高校跡地13.7haを活用。
- イノベーション戦略(3本柱)
 - プロダクト・イノベーションの拠点化。
 - イノベーション・エコシステム構築。
 - 体感できる「わくわくする街」づくり(降りたくなる駅/訪れたくなる街)。
- オープンイノベーションのプラットフォーム
 - FUN+TECH LABO(JR東海委託、旧相原高校跡地):企業・研究機関が参画し共創(例:ヤマハ、JAXA、大成建設等)。
 - SIC インキュベーションセンター:スタートアップ支援。
- アクセス・経済圏
 - 鉄道(京王線・相模線・横浜線)に加えリニアで4線化。圏央道・国道16号による広域アクセス。
 - 中央回廊による新たな経済圏創出。橋本を拠点に1時間圏で約985万人に到達。
- エンタメ活用
 - 世界的にも稀な掘割型工事(長さ680m・幅50m・深さ30m)を公開。毎週金曜・隔週土曜に見学・エンタメイベントを開催。
 - JAXA相模原キャンパス前の博物館(世界初のプラネタリウム:10億個の星・8K映像)との連携。
- タイムライン認識と提案
 - リニア開業は静岡工事着工から約10年先想定(現在「2035年以降」)。部分開業の可能性について議論を歓迎(宇宙関係者から前向きな反応)。

JAXAの最新情報と連携

- KANAGAWA Space Villageとの連携
 - 2026年に関連する大型イベントの模型展示等で市民の応援を得る活動を拡充。
- 2026年の主要イベント(抜粋)

- 夏:はやぶさ 2 拡張ミッション「トリフネ」小惑星の近傍高速フライバイ(科学調査+地球防衛技術の可能性検証)。
- 秋:MMX 打ち上げ(準備は予定通り進行)。
- 冬:ベッピコロンボの水星到着(欧州との協力の象徴的成果)。
- 方針転換と産業波及
 - 科学の達成に不可欠な最先端技術開発を産業推進力として正面から位置付け。
 - 宇宙戦略基金等の成果物の積極活用(自前主義からの転換)。
 - 世界標準の獲得を意識した「ともにつくる(共創)」アプローチを重視。
- 市民・教育との交流
 - 講演会等での双方向交流を重視し、「宇宙に関わることで生まれる豊かさ」を広く共有。

業界の見解とエコシステム

- 産業構造の変化
 - 垂直統合から水平分業へ移行。効率化・スピード重視のモノづくりには産業集積が不可欠。
 - クローズドな文化からオープンな共創へ(ノウハウ共有・参入ハードル低減)。
- 人材・役割の多様化
 - エンジニア偏重のイメージを刷新し、商社・ヘルスケア・食・衣など地上産業と同等の全分野の役割を必要とする「宇宙版総合産業」観へ。
 - スタートアップの課題は「場所がない」が大きい。拠点があれば人が集まる(例:相模原での「マーズタッチ」プロジェクト始動)。
- ビジネス戦略
 - 世界標準(特定パートや機能)の獲得が現実的かつ有望。
 - 争う競争から「ともに作る競争」へ。継続的アップデートを前提にしたアジャイルな開発文化を醸成。

湘南スペースパーク(三菱電機)からの重要なお知らせ

- 構想の目的
 - 産業全体の拡大に資する「市場をつくる」視点で、北(相模原)とのシナジーを発揮する南側拠点を整備。
 - 政府予算や時限的基金に依存しない持続的な産業循環(人・技術集積→事業創出→市場形成→投資誘発)を回す。
- 想定機能(多機能拠点)
 - 衛星製造設備のシェアリング
 - 大型試験設備を含む共同利用環境を提供し、スタートアップのハードルを低減。

- 会場ブースで「すぐ使いたい」など多数の期待の付箋が集まる。
- 衛星運用機能の共用・代行
- 地上からの運用設備・体制を共同利用またはサービス化し、データ取得・サービス実装を支援。
- ラボ／ソフトウェア・デファインド開発環境
- 共通アーキテクチャ・ソフト資産の相互利用を前提とした共創空間での開発。
- 衛星データ活用促進
- 教育・農業・エンタメ等、非宇宙産業とのコラボによる新サービス創出の場。
- 共創空間(産官学・多業種連携)
- 産業界・アカデミア・行政が越境連携し、価値創出を加速。
- 立地・体制
 - 神奈川県南側(湘南エリア)に設置を構想。具体的な場所・時期は未定(構想段階)。
 - 北の相模原工場、南の鎌倉工場、横浜のソフトウェア系エンジニア拠点(イノベーションハブイン横浜)との連携で、ハード・ソフト両面から支援。
 - 早期実現に向けて検討を加速。

まとめ

- 神奈川を「宇宙元年」とし、北(相模原)と南(湘南)で拠点を面をつなぐ方針に合意。
- リニア新駅周辺をイノベーション・バレーとして、プロダクトと体験の両輪で推進。
- オープンで参入ハードルの低い共創拠点づくり(スペースビレッジ/スペースパーク)を核に、水平分業・アジャイル開発へ移行。
- 部分開業のような段階的前進策を歓迎する機運(宇宙コミュニティの支持)を確認。